

作品番号

1

作品名

あか

噴き出した赤どくどくと我生きる

赤子の手重ねて包む春に満つ

勇気出す赤信号が変わる春

理科室のヒメダカに聞く生きる意味

半ズボン 沈む夕日を追いかけて

十年後あなたに渡す赤いバラ

夕焼けの山から見るは君の町

祖母の出すプリンの上にさくらんぼ

バスゆられ朝焼け去るをただ仰ぐ

頬染まる 夕焼けの君 照れる僕

夕焼けの赤が連れてく君の影

トンネルを抜けて夕焼けに消えんとす

夕映えに重なりし朱 祖母の柿

秋空や赤染まりゆく帰り道

秋雨の色落としゆく景色かな

あかとんぼ僕の矢の先 特等席

ふと見ると赤にとけだす宵の闇

荒れ庭にまつすぐ立つや彼岸花

厳冬の向かうすぐ先 朱の春

雪原に堂々たるあかの椿

白銀の上に艶めく赤い月

風に乗り揚がれよぼくの赤い凧

振り向くと街の灯遠く年の暮れ

音のない夜 雪光るうさぎの目

初春や 結ぶ君の手 赤い糸

作品番号

2

作品名

時時享楽

靴照らす春の光がうれしくて

夜夜の焰や踊れ桜雨

麗らかな褪紅の空に雛祭り

自転車のスピードで降る朝桜

我が心残雪のようどけぬまで

遠き日の青くて碧い夏の海

五月雨の隙間に響く鹿威し

八日目の蝉が飛び立つ星の海

流れ星走り終わるや宇宙の道

激怒した母も吸い寄る柚子の花

星合の空に奇跡を希う

我ありと光って見せよう蛍かな

蝉骸残響供えて去る日差し

幼き日夢叫びつつ星流る

夕立のせまる速さは砂時計

満月の見える異世界へと続く

色あせた表紙に響く秋時雨

衣川紅葉しずかに風まとふ

長き夜に魍魎魍魎の饗や酒

寒の水お宝探し龍泉洞

着雪や肩寄せる自動販売機

待つ人と通わせ文の雪誘う

鉛白にブーツの足跡年忘れ

月明かり瑠璃色視く雪景色

澄清の風過ぎ一つ雪仏

作品番号

3

作品名

草のヴェーナス

若菜より青生まれたる台所

境内のかたはら田平子の咲きぬ

除夜の鐘響く夜陰の張る島に

海渡る父の顔笑み初電話

どこまでも行ける気のして初電車

人々より人を求めてヒヤシンス

豪快に池に落ちたる花吹雪

温む水の染みるステージ台に立ち

雪解水我の心を満たしけり

春の闇景のぼやけてをるダメ句

初夏の湯船より数聞こえをり

石庭に水生まれたる立夏かな

月涼し月に絆されゆくダム湖

髪洗ふ風のあるべき所にて

反逆のさざえ網にて跳ねにけり

齒は溺る水蜜桃に侵されて

たこ焼きのほひの迎ふ秋彼岸

ティラミスのスポンジ残す庭紅葉

腕いつばいの想ひ込め秋桜

月きれい妻は「またか」と笑ひけり

マフラーの余りを持つて君を見て

枯蓮のしなり星明りの中で

バス停の前の屋台や冬の月

夜半の冬ビル街支配する女

女医さんは首に葱巻き休診です

作品番号

4

作品名

放課後

新学期私の席はここにあり

数学の補習授業や夏来る

教室の西日は僕を晷針とす

図書室に西日の入りて背の二つ

夕焼けや机に一つ傷のあり

教室に残った空き缶冬夕焼

春夕焼け新入部員待ちにけり

夏来るスパイクの底薄くなり

グラウンドアップする声夏来る

野球部の怒号掠れる大西日

演劇の発声練習秋深く

明るさを残して部室星月夜

夏の夕足どり軽く「また明日」

帰り道僕を追い抜く夏燕

蝙蝠の羽音が聞こゆ帰り道

放課後に自転車飛ばしゆく夏や

夕立やバス見送りて音もせず

夕立やバス停の屋根雨漏りし

バス停に留まっている夕立や

自転車と君の背包む大西日

夕焼けが飲み込んでゆく女の背か

夕焼や私の知らぬ彼の顔

冬夕焼バツシユの底の乾きけり

バス停で白息吐いて愚痴多し

帰り道君と指さすオリオン座

作品番号

5

作品名

圧縮音源

墜落衛星と冬のライオンと

冬銀河魚群探査の放つ明

短日やパレードにまたパレード来

急行を待つ君を待つ雪催

圧縮音源冬の星降り

冬オリオン後部座席を開け放つ

年流る机に方程式残し

石段の緩き傾き初茜

空青く箸に残りし雑煮餅

早や三日長葱首に巻いて寝る

寂しさを集めて球体の蜜柑

カーナビの矢印に触る寒北斗

指先が人間未満雪の朝

壮大な空かき集めたる氷柱

冬萌や人の匂いの自習室

白鳥の翼に青空の重い

春立つや掌に受く猫の呼吸

国の色持つ立春の世界地図

早春の森のひとつは棺へと

航跡は尖って消える春疾風

ガラパゴスヅウガメに春雨のしとやか

ぬくもりがまぶたに座る日永かな

パイプオルガンに溜まったままの春

透明な傷の記憶や春三日月

心臓に触れられぬまま花の雨

作品番号

6

作品名

旅

切り刻む汚れたドグマ旅に発つ

結う髪ゆれる黒色鳴る鼓動

始発便朝焼けのせて昇りゆく

汽車にのり夢がふくらみむねオドル

旅の窓駅弁頬張る君うつる

参道にたたく木陰玉の汗

華華し薫風漂う日本寺

旅の女半分こするチューペット

灼く肌のつたう傘に映る青

夏絵の具キキャンバスの上染めてゆく

バーベキュー匂いにつられ潮風騒ぐ

夏苺ミルクのうずへダイブする

貝がらの海色パレットおみやげに

海岸でバスに手を振る海女たちよ

水そうの銀色カーテン鯛かな

ガラス越しにかつい魚とにらめっこ

水中に浮かんでみえる君の顔

綿々と夜空揺らめくミズクラゲ

頬なぞる夕立風や若若し

汽車ゆられ思い出泳ぐ眠り顔

汽笛きき終止符打った旅の窓

最終便夕焼けおろし流れゆく

陽が落ちて哀愁帯びる我が影よ

家の田のあぜ道跳ねる青蛙

星々と思ひ出浸る端居かな

作品番号

7

作品名

四季折々

夜が明けて凍て緩むのは空の色

春風やさらってゆきし残り香よ

見とれすぎ団子より花落ちたもち

あたたかな麗らか日和朝寝かな

風に住む小さな子どもと百千鳥

宵のうち花影現る朧空

朝焼けが夜を溶かして風おくる

鮮やかな青葉輝く青空の下

海の果て終わりなどなき白昼夢

祖父母宅流しそうめん追う子ども

咲く花火浮かぶ横顔鳴る湖畔

秋近し群青の空消し去りぬ

紅葉とすっかり熟れし私のみ

散歩道雨後の落ち葉がついてくる

踊る猫酔い見上げればうるこぐも

色あせて一面悲しき寒空に

日暮らしが私を残して落ちてゆき

悲しみの散る夜さえも枯れていく

皆死体残さずしとめるこたつ中

その日には誰が吐き出す煙霧かな

風吹けば浮寝の鳥が目を覚ます

銀色に染めた神様街の中

除夜の鐘きかずに一人夢の中

ストーブのうなるぬくもりやさしさに

また起こる四季折々に夢をはせ

作品番号

8

作品名

蒼き呼吸

冬ざれの一片として掛かり舟

凧の果てに卵の販売機

温室にゼリーのやうな陽が澱む

花の名を教ふる人も着ぶくれて

雨に影しつかりとある冬菜畑

帰るでもなくて羽子板市のなか

酢莖買ふ頬骨の出た男から

横たへて夜の昏さの氷柱かな

杉蘇の蒼き呼吸やクリスマス

水琴窟聞くマフラーの危ふくて

葛湯のむ底のそのままざざれ波

年用意猫の日向を拭きにけり

ゆく年や画鋏に残る切れつ端

参道のひかり啄む初雀

母が付けしこの名が好きで新日記

鳥総松影のひとすぢ震へけり

飛んでゐる夢を見てゐる破魔矢かな

ひゆるひゆると空掬ひとる二重跳び

雪まみれのからだをバスに押し込みぬ

除雪車が翼のごとく雪を吐く

セロリ噛む眉のはつかに上下して

にんじんの舟めくビーフシチューかな

毛糸編む鎖骨のうつくしく動き

薬飲む前のひとくち室の花

電話帳黄色くにはふる四温かな

作品番号

9

作品名

流星群

桜開花宣言三つ編みをほぐす

花月夜校内迷子の一年生

公式を書き終えただけ桜餅

椿落つさといな計算ミスひとつ

万愚説「好きなんです」の裏の裏

若葉風先生までクラスTシャツ

向日葵が道塞ぎたり通学路

夕立やアンサー $\log_0 0^0$

夜店道汗ばむ君の袖を引く

チョコバナナサンデー二回目のデート

無造作な教科書の山にパイナップル

サングラス買えば私は大女優

あと一本旗は上がらず夏蜜柑

来年は傍観者なり夏の果て

蝸やただただ日々を浪費する

五限目にまどろむあの子桐一葉

コスモスや君付けでまた呼んでみる

星月夜大声で歌ったっていい

5 + 7 + 5 || 流星群

冬日和それいけ雑巾がけレース

月冴ゆる明かり消されし三両目

初笑い私服姿の友と会う

蜜柑むく元彼の手を見つめたり

厳冬や絵文字は常に笑ってて

春風やこれからは違う道に行く

バルコニー爪先濡れて梅雨の夜

はらはらと箸からこぼれ洗い飯

席替えの新しい席赤とんぼ

長雨や通り路にある葡萄棚

宵闇や足音立てて坂下る

ただいまと声を掛ければ月鈴子

星型のヘアピン光り小春かな

自販機にコーンスープがあつて冬

ここにいる雪虫みんな私です

金星の光まつすぐ冬夕焼

冬の夜の街灯に息照らされる

冴ゆる夜の一人で歌う合唱曲

マフラーに顔うずめつつする呼吸

ロッカーの問題集の冷たさよ

先生の煙草のにおい冬の空

冬麗らとめはねはらい大げさに

冬ぞるる駅のホームの燕の巣

冬晴の線路は続くよ南まで

一人には小さな傘だ夕時雨

細雪ほろほろと君こぼれだす

少年の息は冷凍ビーム冬

手帳買うまずは書き込む誕生日

笑初はてさていつ笑ったかしら

凍晴や僕に見られるための海

こがらしやポストに溜まる不在票

名を知ればすぐそこにおり鉦叩

爪先を上げて団栗踏んでいる

抽斗の団栗知らぬ穴のあり

図書館を出られなくなる秋の蝶

昼休みかんの筋を取れば終わる

露霜をつつと小指でたどりつつ

父帰る音にまぎれて茶立虫

木枯や駅への道が軽くなる

マフラーの色が感染女学校

初冬や胸がふくらむほどに息

学ランを通り抜けていく寒風

スコップを掘り起こすため雪を掻く

冷凍庫元雪うさぎ眠りいる

間道の兎のシチュー専門店

着ぶくれにこんなじゃないと怒る君

空つ風避けられなかった目の痛み

口笛がかすれて消える冬の夜

ゆつたりと枯葉の旅や名なき川

冬木立一人櫂に寄りかかる

深山に陽を見上げている狐あらん

地に伏して重いまばたき冬の鹿

ハリネズミのための毛布を買いにゆく

靴履けばひりりと寒し笹子鳴く

防犯用カメラぴかりとして狸

かけうどん（中）を並んで食う寒夜

作品番号

12

作品名

相関図

賀状撒く私父父母私

雪解けて解放される街の色

節分やクレヨン面の子鬼出る

ブランコに生まるる風や女の声

陽炎や店の看板飲み込みめり

天窓に宝石一つシャボン玉

春眠の暴走止まらぬシャープペン

新タイヤ足取り軽く夏来る

さくらんぼつまむ双子のペアルック

おさがりのバットを振れば金魚飛ぶ

ホームラン冷し瓜まで飛ばしけり

5時に鳴るサイレン西日を越えてゆけ

日焼した小鼻に染み入る化粧水

罪人の懺悔のごとく髪洗う

つるれいし窓越しに張る相関図

指紋さえつけてはならぬ曼珠沙華

夜鍋する祖母の体温かぎ針に

不知火や火星の石が降ってくる

草市の終りは橋となりにつり

風邪ひいて母の小言も今日はなく

ため息を吸い込んでゆく枯木かな

寒椿祖父亡き庭に点描す

ポケットに厚き手紙や夕時雨

橙のパン屋の灯り息白し

雪空に音の聞こえぬ家路かな

沖風の戸を叩きつつ空の凧

蜜柑籠混じる緑の残念賞

厳冬や昼食はミネストローネ

冬うらら二周目の脚気炎上げ

冬の日や積まれた宿題さす西日

寒月下川のほとりの牛舎かな

坂の上反り目はみ出し星冴ゆる

手水場の水音しづか冬北斗

疾風の爪弾く夜や寒昂

今朝に肌出て久方の雪催

雪催鍵穴の奥の奥の黒

初雪や上着の闇に染み込んで

初雪や軌跡は逸れて事故現場

息白し登校に三時間の日

初雪やぼんと真面目な話出て

帰り道ビルの隙間に憑く暮雪

粉雪や石階段にしがみ付く

水雪や足跡光る夜の道

街灯に戯れ掛けて六花

雪明かりふと洋庭に迷い込む

昨晚の夢溶け込んで氷柱かな

小米雪実家の雀まるまると

風花のふわり沈黙響かせる

雪の声おんぼろ傘を壊さんと

線路脇色を変えない水雪よ

作品番号

14

作品名

夜

みしみしと骨疼くまま春の闇

隣ゆく人もいなくて春の月

夜桜や和楽器のまだ鳴りやまぬ

足音は今日から一人春の月

曾祖父の口承神話朧月

白梅や手のうつくしき人形師

春風に吹かれ眠気を覚ましたり

向日葵や夢の中では笑う人

星果てて浴衣に残る煙草の香

夏の月草ばかりなる古戦場

左右まだわからない子の盆踊り

真夜中のラムネがしみる数学者

工場の轟音止まぬ熱帯夜

宵闇や通り魔の手配書落ちて

失恋と失恋の果て後の月

鳶紅葉眠る砦の岩を抱く

カルデラの水面は静か星月夜

夜学子と星を数えている遊び

ゆつくりと船進みゆく星月夜

冬星を二三個生めり鍛冶の音

孤独なる路上シンガー寒の月

サンタクロース靴下は子の腕の中

アンビアンナイト語りし日の時雨

学校をのみ込んでいく冬銀河

廃村へ一步踏み入れ夜半の冬

親友の帰国の報せ二月果つ

川底の石拾ふ日の水温む

一つずつ埋まるパズルや春動く

合格と声にしてみし春の夕

初花は電車ごつこの終点に

手を繋ぎ帰る祖父母や春の夕

ヘアゴムの取れかかった子山笑ふ

十字架に風押し寄せて春入日

新しき鞆背負ひて桜東風

裏庭の宴の準備桜時

原文のまま本を読む長閑かな

作文に翳りかすかに春燈

アルバムの校歌なぞつて卒業す

花疲れ列車は夜を運びゆく

佐保姫の笑みの着物に濃くなりぬ

口元に擦れし紅あり春燈

面接の順番待つてゐて初音

電線に絡まつてをる朧月

木々鳥の母胎となりぬ山笑ふ

朧月都会のビルの高きこと

道端の上向く蕾風光る

硝子戸に漂ふ朧月二つ

行商の春一番を連れて来し

春の闇地層へ幾度染み込めり

春惜しむ写真フィルムに残る君

作品番号

16

作品名

受験

学生の鞆の重さ凍てる星

朝焼けを右目に見やる白ダルマ

ピリピリムード受験を控えたお茶会

受験期を迎える心赤い梅

漂色窓の外には照る氷柱

凍つる星窓から見える努力かな

D判定に凍てしいちまひの枯葉

隙間風温め直されし夜食

冴える風ノートをにらむ赤い頬

冴えたるや三年の階過ぐるとき

冬鳥や右肩のふけ払うとき

教科書の雑ざるマーカ―霜の声

踊るペン小指冷たし緩む頬

日脚伸ぶマルよりバツを数えんと

前期まであと一日の文字冴える

駐輪場の二月日曜の塾

鉛筆のかたちにくこむ中指よ

振り返る確かな努力サクラ咲け

センターの前日の風呂冬星座

玄関の受験子の背の曲がりけり

冴返る3―2の教室広し

冬の雨まじる踏音試験官

雪時雨答案もまた白寂や

教歩先に並ぶ数字に山笑う

教場の書生の気立て春隣

第一志望の風船掴めずに

梅が咲く推薦受かった友を見る

合格が春一番で脱皮する

春風や証書に残る涙跡

花曇り電車のライト風浴びる

蓮の花あの子に会える部活まで

風薫る部活帰りの疲れ消す

夏祭り相合傘でりんごあめ

朱に染まる夏夜の空と君の頬

告白後雹降るような返事来る

動かない風鈴のため風よ吹け

甲子園初戦敗退虹消える

ベランダで星と風浴び年を取る

台風は小鳥の命奪わずに

青北風や祖母の病が回復す

天の川席替えしたら橋架かる

両思い会えないうちに秋の暮れ

流星が頬を濡らした午前四時

月冴える既読になった「会えますか？」

悴む手デイズニーチケット買う日まで

クリスマス寝坊したまま終わるイブ

大雪や罪悪感も溶けぬまま

冬の風浴びてふるえる通学路

木枯らしや自由な空へ舞っていけ

枯菊がドラフト一位選ばれる

作品番号

18

作品名

透明

雪溶けて澄むその理由をまだ知らず

見えずとも掴めるような桜の音

しやぼん玉蒼天閉じ込め昇りゆく

恋心教えてくれと葛桜

追いかけて触れぬ手を撫で蜃気楼

嫉妬心瀟過してろかして恋心

波とゆくクラゲの声に耳すませ

汗をかく耳に涼しいラムネ瓶

夕焼がビーカーに入る200ml

朝露や冷気を集め輝けり

すり抜けて遠のく人と彼岸花

早梅が陽のはじまりを告げている

アイリスの萌芽を映すエコー写真

天高し世界に響く産声よ

深海のクリオネに見る命の灯

悠々と氷湖の中を泳ぐ鯉

透き通るつららが語る自然の美

日を抜けて湖面に映る冬木立

雨粒が僕と彼女を繋いだ日

美しい氷の街に閉ざされた

思い出の桜見えない君の声

この目では映せぬ君が此処にいる

冬の空この胸笑い透き通る

冬空の澄んだ街駆け逢いに行く

その姿月夜に浮かぶ銀世界

作品番号

19

作品名

花

フルートの音を吸いこむシクラメン

酒あおる父の姿と梅の花

ぐちやぐちやになった椿とタイヤ痕

スギ花粉マスクが必須飛ばないで

タンポポや共に歩いた通学路

チューリップ見るたび思うおいしそう

春雷や墨一色に添える花

桜散る ただ立ちつくす後ろ姿

今日もまた桜の水面揺れている

ツツジ咲き蜜吸い歩く帰り道

爽やかな風吹く道のマーガレット

あじさいを傘替わりにすカタツムリ

なんか臭いマリーゴールド生えないで

愛しさも酸いも甘いも苺かな

おはようと挨拶交わす夏椿

浜茄子は茄子なのかとおもってた

朝顔は隣家に顔を出しにけり

コスモスや夜風の波に溶ける紅

青りんご頬張る音を聴いていた

魂を絡めとるのが彼岸花

水溜の紅葉は歪む雨傘

椿咲き秒針の音鳴り響く

水仙に滴る涙枯れてゆく

フクジュソウ光の奥にただ一つ

「会いたい。」とアングレムの花卉落ち

作品番号

20

作品名

カラフル

カラフルを極めし街の夜寒し

外濠の集いをる鴨夜の底

深雪晴れ鉛筆は日時計となる

漬け石や森少しずつ冬眠す

鼻風邪やいつもの直線が引けぬ

オリオンの肩もがれゆく夜に一人

雪払い息ひとつ吸えば豚骨

紐解け落ち込む凧よ息はずみ

産毛剃り高2男性夏ぎざす

紅き月人のない町に沈む

斜線ひき削る絵皿よ神無月

初詣居どころ変えても変わらず

入るときだけの会話よ掘炬燵

夜にあるために焚火は枝を食ふ

消えてゆく別れの電車すすきなぐ

台所仕事から逃げ日向ぼこ

山神と鬼の棲む洞月天心

軍港のとき告ぐ鐘や冬夕焼

成人式済めば大人の服を買ふ

肩に乗りオリオンなぞる小さい手

木枯らしを土俵の外に押し出した

寝そべって地球を回す冬の夜

お前がいなから冬の夜楽しい

牡蠣を食ふ故郷の海の空気ごと

白百合は滴る夜を吸ひて生く

スピーチの苦手な人や蝉しぐれ

陽炎や文理選択締切日

C判定翅のねじれしアゲハ蝶

教科書は知っただけにして初嵐

秋暑しテストに出ない英単語

若葉風不意の指名にページ繰る

コンパスの針しつかりとささる春

秋風やまぶた重たきリスニング

文字盤のⅫ風花降りにけり

学校を出て夕焼を広げたり

焼きいも屋野球部員をすり抜けて

彫刻のやうな鳩なり秋麗

通学路脇の夫婦や桜草

打水や古木の匂ふ喫茶店

春うららホイップクリームは正義

月見草いびつな影の長きこと

夕がすみ家の灯の近づきぬ

鈴虫の鳴き声満つる厨かな

ごりごりと南瓜くりぬく母真顔

湯ぞめして新書二冊を読み終へぬ

青春を語るる母やプチトマト

星冴ゆる二次関数のきれいな日

ソーダ水まだ埋まらない感想文

試験近し銀杏をひたすらに割る

雨月物語でこまかす熱帯夜

指先の胡蝶ゆく未まだ知らず

花の宴隙間を覗き瓶覗

春霞葉指に感ずる不安

藤波の風に孤独を増してをり

むらさきの匂ふ真夜中髪洗ふ

ぬばたまの闇にまぎれて初浴衣

月影の揺れて空蟬の転がる

廢屋の斜陽夕顔の白き

前栽の二人覆ひて夕野分

知らぬ間に育ちしこころ捨案山子

夕霧の隠しきれずに朽葉色

わがままはわがままらしく病螢

長き夜にながくもがなともの語る

着ふくれて愛ある嘘も嘘のまま

後朝の文も忘れて夜半の月

桐一葉雨の当たらぬ場所に置き

皇女達の紅の色濃く冬の霧

一族の愛の果なる実むらさき

パレットに浅葱色足し冬麗

雪月夜乙女の巻の秘めしもの

青鈍の空にひとつの朧月

逃水や光る君追ふ半色

灰となりふたり舞ふ夢花篝

春うららましかばましの通学路

昼下ラと麦茶と源氏物語

作品番号

23

作品名

高校生

制服の匂ひは若草の匂ひ

初蝶や始めの一步転びます

ファインダー覗く瞳に花桜

薄紅の花弁舞い散る桜道

陽差したり教卓のガーベラの白

椿挿す三年理科の授業かな

草を刈る青いジャージのボランティア

水を得た魚かがやく水泳部

青嵐紅のレガース放る

垂れる汗秘めた悔しさ目になじむ

校門の番人したる大蟻螂

教科書を繰る音のみの秋の夜

自転車のハンドル握る秋寒し

帰り道今日は新月まっくろけ

あの道の落ちた銀杏慣れぬまま

蜜柑剥き教室中に香り駆け

霜月から見る女ら黒い足

北風や虐殺の日の登下校

冴ゆる夜死神の鎌首を斬る

年明けて持ち物一つ赤本を

教員も鼻水啜るテストかな

制服や指折り思う卒業式

丸メガネ磨く卒業式の朝

どの顔も大人びる卒業証書

アルバムを小春日和に懐かしむ

作品番号

24

作品名

エトワール

鳥雲に指揮者タクトを振り上げて

教壇で伸びする教師水温む

入学や母から子へのレシピ集

泥団子机に並べ長閑かな

人肌になれば割れゆくしやぼん玉

霊園に飼はるる犬や風光る

女人の眼鏡無き顔風薫る

油絵の色定まらぬ立夏かな

滝となるときに水面の光りけり

放課後の聖書をめくる薄暑光

ジーンに変なTシャツ半夏生

ばらばらの拍手響きて夏旺ん

ひらがなの宝の地図や雲の峰

コスモスや筆のタッチは優しくて

吊橋を走り抜けるや秋の空

流星やロックバンドと夜行バス

寡黙なる祖父の肩章カシオペア

初冬や顔のぼやけしエトワール

おしやべりの呼吸毛糸を編む呼吸

書きかけの楽譜散らばり冬薔薇

ちゃんちゃんこ着てるわたしは好きじゃない

なめらかに軋む聖夜の寝台車

井の中に音の消えゆく枯野かな

おほかみの墨色のこゝろ響きけり

白鳥の飛び立つ前にタクト置く

作品番号

25

作品名

犬も歩けば棒に当たる

棒読みのニュースキャスター桜かな

遠足や使つてんじやん三河弁

崩れゆく紙風船を空に上げ

春炬燵あれそれとれと命令す

春の蠅平穩奪う羽音かな

お祝いの紙飾りゆれ番蝶

新人の発車オーライ陽炎燃ゆ

土塊の青き味なりふきのとう

日本中恋を集めた桜餅

再開をテニスで祝う春麗

夏の川鷺の口から出る尾鰭

短夜や机の上の方眼紙

マウンドに潜む魔物や晩夏光

秋の虹応援団の背をのぞむ

夢に出る恋は紅葉の赤さかな

虫籠に祖父の追憶隠れけり

秋の夜浮気現場を目撃す

冬の朝犬も歩けばくしやみする

冬晴れる長いスカート翻す

卓袱台にカステラ温く冬紅葉

睦月の産子逝つたあなたと同じ癖

夕暮れに染まるほつぺた冬林檎

境内の草木さざめく神迎え

暗号の交換日記冬銀河

ポケットにカイロ突っ込み旅立ちぬ

作品番号

26

作品名

春の雲

春の宵二月で止まる日記帳

雪解けのポケットに一枚乗車券

つま先に重心かける木の芽風

赤銅のマンホール打つ春時雨

春の暮工事シートの波騒ぐ

パン屑が星屑になる春の夜

春愁や友は黙って髪ほどく

春雲放課後ひとり読む『こころ』

路地裏に春の雲の靴の跡

少年の尖った耳や春雲

祖母の手の分厚きに沁む春雲

春雲耳裏で髪留める母

リビングで眠る弟春雲

バスソルトのぬめり背中に春雲

隣人の再婚の報春雲

春雲胎児のまぶた閉ぢてをり

春雲シャッター音の錆びてをり

花冷えや貸し出し中のラブソング

陽炎や繰り返される子守歌

体育着の膝のワッペン春の雲

しゃぼん玉母に謝ることがあり

跳び箱を一段増やす春の暮

洞窟の青を眠らせ春の闇

閉校式春光纏う校歌かな

ローファーの上にひとひら春灯

入学や坂の向こうに思い馳せ

リラの花弾む靴音集めたり

青麦や競り合う背中唄れる声

強東風や心を叩く彩太鼓

夏めくや十七音は思い出に

炎天や球児は拳突き上げる

日盛りや鳴るな鳴るなよ始業の音

青空に抱かれ歩くや夏休み

声交わす間に溶ける氷菓かな

三十一字連ねているは啄木鳥か

秋寒や答え写して終わる夜

秋祭体に残るあのリズム

よそ見して名前呼ばれるとんぼかな

夢のため己見つめる夏天かな

木犀や彩り魅せる文化祭

紙の中景色移ろう秋の雲

隔てても笑い声咲く秋桜

冬空や古き都の風を聴く

銀閣を思い出とする初氷

頬赤く恋を語るや室の花

君の背に降りかかりたる霰かな

唐梅やペンを持つ手が武者震い

思い出をポラに収める寒薔薇

残雪や恩師の涙見上げたり

巣立鳥揺れる思いを詰め込んで

きつかけのあを冬の戸を開けたれば

凍星を打ち落とすやう竹刀振る

テスト続きて裸木と目を合はす

帰り花ジャージの裾をめくりたる

冬の野を猫跳んでゆく遠さかな

思ひ出となりゆくインク新日記

福笑背中を向けてゐる従兄

七草を抱へて白き指の人

地をつつき初鳩朝の音となる

初詣君を忘れるためにゆく

この指に止まりし子より春来る

それぞれの制服の向く桜かな

春の水すこし猫より逃げ出せり

春深し飛び立ちさうな楽譜の鳥

何気なくサンバ踊つて卒業す

一拍を置き万緑を吸ひにけり

えんぴつのキャップ木の下闇へ落つ

昨日まで虹を知らない猫であり

飛ばされて袋は夕焼喰ひちぎる

空つぼのトラック夏の月を積む

試験果つために紅葉へ石を蹴る

秋宵や子に掴まるるタイガーアイ

いわし雲黒猫を追ひかけてゐる

秋天のジェットコースターに縫はれ

引き金のゆび秋水に触れたあと

敬礼の手に春光をうらがへす

陽炎や花屋の陰のほひたち

耳をみづ出てゆく温さ春の星

遠足のかばんを傘のはみ出せり

菜の花や大型バスの行つたきり

陽炎の踏切を待つ介助犬

雨だれのあかるく初夏のベンチ

夏草や檀家専用駐車場

からつぽのバスタブならぶ涼しさよ

柚子の花ひらく日照雨のあかるさに

城跡に白百合しんとして立てり

濡れにゆく子らを見てゐるサングラス

ライオンは人を見飽きて夏の果

桃の実のみづを預かる刃かな

ありつたけの空奪ひ合ふ葡萄かな

いくつかの橋を隠して紅葉山

茸狩言い訳があるなら聞くよ

着ぶくれてストローの節曲げてをり

S Lの固き煙や鬼やんま

海原を耕すごとく鯨の尾

向かひ合ふマスク夜更けの観覧車

初写真いつも誰かの抜けてをり

晩冬の海を向きたる投光器

馬の背のぬくし建国記念の日

革命の色をしてをり落椿

大雪やジャングルジムの低うなり

ウォーターサーバー固まりて冬の朝

冬の星リアトの内緒話かな

プレゼントにかかりし雪を払ひけり

窓外に家族集ひて雪を搔く

寒月を振り切りたるはダンロップ

雪山のやわらかき角低気圧

湯たんぽや開口部より泡の出る

ソール跡崩して進む冬の晴れ

寒月や国一つ滅ぼし忘れ

答案の右角折りて冬始む

三つ星や小枝を刺して団子とす

制服のリボンの赤やクリスマス

テレビより聖夜の歌やうどん食ふ

雪玉のごと黒板に磁石あり

目を閉ぢて目を冷ましぬる雪見かな

冬焼やいづれ遺品となる時計

懐炉熱し皮膚のすべてに布ふるる

ジャケット脱ぐ働けばとりあへず大人

寒さうにしたる信号待ちの足

雪達磨醜き凹凸も愛す

ぬめる者全て寝てをり寂しき冬

嘴に雪を挟みし鳥跳ぬ

茅葺を重うせしむる冬の雨

霜花の美しき我が風除室

作品番号

31

作品名

寄り道

指揮棒のぐんと上がって夏初め

ハンガーにひっかかりたる若葉風

床のみが新しき部屋青嵐

白線を歩く苺ミルクがぬるい

夏の川ミルクティーの味せんかな

石段のぐらつくひとつ草いきれ

向日葵や組体操の笛きりり

色おそらく命の定義水中花

秋初めヘアカタログの角を折る

クロゼットに横文字溢れ敗戦忌

短冊を結ぶ保母あり星祭

居待月圧力鍋のしづかなり

流星を見つけるすぐに飴を噛む

掻き分けたしこの木犀を掻き分けたし

雪うさぎ双子なんかに生まれても

流星を握り損ねて滑り台

バス停のつららこわこわ眺めけり

遅刻します霜柱での遅延です

いつか死ぬ僕はオリオン座になるろう

竹馬や路面がりりと速さかる

マラソンは復路ふくらむ桜あり

この花を描くためにこの黒が要る

花冷えや印鑑じんとしみゆく

石鱈玉こんなからだを生きゆかむ

春風を入れたりユックサック軽し

しやぼん玉吹かう運命変はるから

霞草ひかり抱くごと受け取りぬ

君の住む街の名うつくしく燕

卒業の胸に花ある家路かな

はつ夏の光に濡るるレースかな

マネキンの脱がされて夏了るらし

数学に晩夏のジャスミンテイーぬるし

噴水に人を待たせてゐる時間

夏服がからだに溶けてゐる川辺

醤油いま豆腐の角を涼しうす

夏帽と肩の透けたるブラウスと

金柑を積んであかるき机かな

ぬぼたまの月夜のバイクシヨップかな

月冴ゆるムーン・リヴァーの調べにて

指先の切り傷痛む空つ風

枯野にぼつりサッカーボールひとつ

静寂を二乗するよな冬の月

私のまぼたきはオリオンとなる

夢を見る同じ名の水鳥の旅に

冴ゆるかな図鑑にアンドロメダ銀河

初雪やあの日の白よりくすむ白

水鳥やだだ一輪を残しけり

進路表白紙のまままで春を待つ

すずめらがミソソと並ぶ小正月

歌留多取る従姉妹の髪の軽さかな

反故紙に体温与え十月来

虫の音や森の野風呂に影深し

禁厭が身近な祖母や柚子を濾す

手のしわの深く新米掬いたる

アライバイなき日々の代価として檸檬

身に入むや影なめらかに金庫室

悲しみ方を知らず秋の田を行けり

立冬の黒板森の昏さなり

白息の絡む婚姻四日前

語尾という語尾を吸いたる雪景色

みどり児のこむら逞し冬木道

川の字で寝ているチヨーク漱石忌

セロリ刻めば一人で町に在る心地

厳冬の浜にかもめの等間隔

アフラーをきつく洋画を観に行く日

ドロップのハッカ残りし開戦日

フライパン温める音春隣

パダの頬上下すあそび春立ちぬ

赤錆色のホテル送迎バス日永

石鹼玉言葉は意味へ急ぐなり

百千鳥お歌のやうな喧嘩のやうな

鼻提灯割れて臍となりにつけり

三月の赤べこしつとりと領く

花冷えや無様な塗り絵のような街

畳まれたタオルの塔の影に春

春コート菓子匂ひの旅靴

学び舎をひとの大きく余寒かな

ロッカーのノートの湿り春寒し

黒板に脳の模式図蝶の昼

暖かやトムもジェリーも出す目玉

まどろみにペン落とす音山笑ふ

白杖の軽やかに過ぐ薄暑光

怒濤以後みな新しき日陰かな

黒南風や駄菓子屋跡地売られをり

読了の涼しき寺の月を見ぬ

夏風邪やティッシュの箱に覚書

記憶では私首振り扇風機

盥蘭盆やトイレのスリッパの乱れ

はつ秋のつげ櫛の歯の暗さかな

燈籠の揺蕩ふうちに雲流る

強情な叔母立ち止まる花野道

子を迎へけり七輪の初秋刀魚

汝もまた流星を待つ列となり

ピント合ふ冬青空の深きまで

神無月光に熱の無きを知る

大げさな社説の見出し蜜柑剥く

底冷えの拳や手術室ひらく

車列縫ひ我が車へとゆきをんな

氷海の先に陸ある舳先かな

初日射す水に囲まれ五陵郭

スクールカースト狼星は落ちるか

失恋や火星に雪の降ったらし

マビノギオンマビノギオン雪だけ生きている

冬風や永遠に似た喫茶店

薄氷やくるりクレープ巻く手首

ロックンロール！毛布叩けば埃立つ

新しきブーツ冬日に洗われる

海思うマスクをしない奴二、三

歩けと言わんばかりに線路秋の風

山桃やわたしの心臓賭けてもいいよ

ハーフかつ脱走兵かつ春の猫

花は葉に三十九人の学級

真夜中に裸足を憂れふ海月かな

吾は吾網膜に差す雪解光

劣等感につぶされまいと冬の星

暖房の勝手に休むこともある

冬浅し机に彫つてあるハート

凍蝶や木星に仲間いるやうな

殺人をしそうな人などいなくて世

セーターの何処かへ星のひっかかる

グレゴール・ザムザになれず暖炉燃ゆ

鉄塔のかたちに雪の降つてゐる

カーデイガン宇宙のことを学びつつ

パンダにも睫毛あるべし年の暮

仰向けになつて銀河に向けて泣け

生命の派生エリカの靄のあと

ユズヒコを遠く見た春やみかん越ゆ

角石の角も削らん河鹿鳴く

細胞性粘菌さがす菜美子の忌

弥生君待つ僕の影は日時計

サクラサク雨一番の降る日かな

遠雷が鳴る父が持つ進路書は

その手すら嫌いたくなり水羊羹

日雷低い旋毛にひやりとす

うたたねと殺虫壇と白鳥と

数学の教師の喉に目借時

かんだしの君が脳内夏の季語

プランクに幽閉粘土塊と落ち葉

雪柳第二釘を喰らひたひ

凌霄花高らかに鳴り目をつむる

ぬらるらと麦酒焼鳥我の父

逃げ水であるとは知れど彼女の背

しとしとと降る夜のこと虫の声

彼女を大事にしると缶コーヒーの湯気

花落つる先には彼と同じ皺

病室にただ冬落暉のみぞ来る

薬降るグルコサミンの浮く胃液

ぽつぽつと点る結びや秋の星

青天にたぶん死神繭の群れ

夏の海に沈む菩薩のように死ね

歩かねば我責め立てる蟬時雨

睡蓮花そのすぐとなり花しようぶ

稲避けて水田泳ぐ目高たち

セミの声川の流を掻き消して

目高食う蛙も元はヒレを持つ

山清水喉にしみ入る夏の味

木々の上枝で眠る燕の子

虫鳴きて昨年の夏を思い出す

山登り山頂見上げ積乱雲

原色の若葉や弁当は違ふ

夏帽子草木と隠す笑みの影

昼が過ぎ空見上げると夕立が

木下闇影に香るは君と土

卯の花をさした髪編む昼下がり

時流れ枯木青々夏の山

合歓の花その頭上にも虹が咲く

うちわ持ち思い出背負い山登り

夢に舞う夏の白雪合歓の花

白百合を摘んで帰ろう病室に

無理をして得た実が苦い桜の実

手鞠花握りつぶせど来たる風

風鈴が風に揺られて飛んでゆく

夏の日にはムスタートを連れ田舎へと

夕風にたくした想い 伝う涙

またいつか 誓う言葉に 揺れる夏草